第79巻の巻頭に寄せて

全国国立病院院長協議会 会長
 国立病院機構仙台医療センター 院長 江面 正幸

IRYO Vol. 79 No. 1 (3) 2025

新年あけましておめでとうございます。

昨年12月に国立医療学会機関誌「医療」の巻頭言の依頼をいただき、改めて過去10年の巻頭言を読み直してみました。和文誌である「医療」の苦勞が良くわかりました。私は現職の仙台医療センター院長になる前は同院の臨床研究部長で、同時に「仙台医療センター医学雑誌 (SMCJ)」の編集委員長を務めておりました。「SMCJ」の第11巻 (2021年) の編集後記に書いた内容を抜粋します。「……ところで、日本語を母国語とする人であれば英文よりも和文の方が良い内容の文章を作れるはずである。これは読者目線と考えたときにとても大きな要因となる。当誌はアクセスの良さが売りである。例えば診療の合間にスマホですぐに参照できる。……。当誌の柱である総説も他診療科領域の現状を知るのに、英文では少々とつきにくい和文であれば容易に理解できるであろう。つまり和文論文・和文誌というのは読者目線に立ったとき、まだまだニーズのある形態なのではないか。……まとめると、投稿者にとっては論文登竜門としての存在、読者側としてはアクセスのよい雑誌でわかりやすい内容が書いてある、というのが当誌の立ち位置であろうと考えられる。……」というわけで、私はまだまだ和文誌のニーズはあると思いますが、それにはアクセスのよさが不可欠ではないかと思えます。その点失礼ながら「医療」はあまりアクセスがよいとは言えません。「SMCJ」はweb版を先行公開して、年1回だけ印刷版を発行し

ます (年3号で3号発行時に3号分まとめて印刷版を出版)。web版は仙台医療センターのホームページにバナーが貼ってあり、そこをクリックすると読めるようになっております。対して「医療」はNHOのホームページからアクセスできるのか、私にはできませんでした。またweb版は1年以内は抄録だけしか読めないようになっております。何より「医療」で検索しても医療に関するあまたのページが出てきなかなか「医療」に到達できませんでした。これらのことは生成AIの発達、オールドメディアとニューメディアの対立、これまでの歴史などとの絡みもありますので、解決が難しい点多々あるとは思いますが、時宜を逃さないよう適切に対処いただければと思います。

以上は「医療」がこのままの形で継続することを前提にした話ですが、「医療」そのものの今後については、第72巻の巻頭で直江先生が「国立医療学会」と、「総合医学会」「医療」との関係の再構築について私見を述べられております。私も「総合医学会」に5000人もの方が参加されるのに、その多くの方が「国立医療学会」を意識していないのは問題ではないかと思えます。この点を整理できれば、その機関誌である「医療」も大きく変換できるのではないかと思います。院長協議会の会長として今後の「総合医学会」会長にそのことをお伝えする使命があると強く感じました。

本年もどうぞよろしく申し上げます。